

## 「あさいと」四国の手話①

徳島県 小笠原 宏「四国一周自転車の旅」

僕は、高校生の時、陸上部にいました。二人の先輩と一緒に体を鍛えるのが趣味でした。その時、先輩が「いつか自転車で四国を一周しないか」と言うので「うん、やりたい!」と話が決まりました。

その後、ろう学校を卒業した19歳の時、先輩からメールがありました。「今度、4月の下旬から5月の中旬のGWの間に、自転車で四国一周をやろう?」とメールがあり、「いいよ! やろう!」と返事をしました。

当日、4月の下旬に徳島ろう学校をスタート。3人一緒に自転車に乗り縦に並んで南に向かい四国の右下へ走り出しました。徳島を出発したのは12時過ぎでした。四国の右下、室戸岬の灯台までは時間がかかり夜になりました。室戸を過ぎたあたりで、夜も時間が遅くなったからここで泊まろうとテントを張りました。

テントを張る場所は、道路から見える草の茂ったところでよいか、とそこにテントを張って寝ました。しかし、テントに横になってみると、背中が硬くてとても寝られる状態ではなく、1~2時間してもなかなか眠られません。先輩二人もどうやら同じで寝付けられないという。もうテントを片付けて出発しようかと話しました。テントを片付けて、荷物を自転車に乗せて夜道を出発しました。

高知県の安芸あたりを走っていると夜も明けてきました。体も疲れているからここで寝ようかと話をして、走っていくと道の横に休憩所のような東屋があり、机といすも備わっているの、そこに自転車を止めて椅子に横になりました。疲れていたのですぐに深い眠りに入り、2~3時間ぐらいで目がさめました。体の調子を確認してまた走り出しました。

高知市まで行きました。体も疲れているからお風呂に入ることにしました。見るとビルらしき中にあることがわかり、お風呂に入りました。シャワーを浴びて服を着てほっとすると、先輩二人は、目を丸くして驚いた顔をしている。「どうしたんですか?」と訊ねると、「やばかったぞ」とびっくり仰天した話をしました。

僕が一つしかないシャワーで体を洗い終わり戻ってきた時の様子を二人の先輩が見たらしい。そのときびっくりすることがあった。僕がシャワーに行こうとしたとき、反対側からもほかの人が歩いてきた。そのがっしりとした体には肩からすごい絵が描いてあったらしい。(自分の口からははっきり言えないので、言葉は想像に任せるけど)僕が知らずにシャワーを使ったので、その人はもどった。いわゆるやくざ(任侠)の人だったらしいのです。それを聞いて僕もびっくり仰天驚きました。あまりのことで胸がドキドキしたけど、まあ気を取り直して頑張っていこうと自転車のり出発しました。

須崎まで…(手話が分からないのですみません)過ぎたあたりから急な登り道がはじまりました。自転車をこぐことが大変苦しくなりました。二人の先輩は遅れてあとから登ってきます。どうしてかという、僕は19歳で若いし、高校生の時体を鍛えていて体力は残っていました。1つ上の先輩と4つ上の先輩はもう仕事についていたので、体力も落ちているかどうか分からないけど、僕を先頭に3人は離れて登って行きました。自転車をこいでもこい

でも峠（先は）は見えません。まだかまだかと坂道は続きました。「もうだめだ」と思い、そこで初めて自転車を降り押し登りました。このあたりなら大丈夫かなと思ってまた自転車にまたがりこいで峠まで登りました。暗くなった先にコンビニの明かりが見えて、中に入って先輩を待ちました。二人の先輩が次々とやってきました。晩ご飯にコンビニでおにぎりなどを買いました。夜になったので宿をどうするか相談しました。テントにしようか？でも体も疲れているから、旅館かホテルで休んだほうがいいと話をしましたが、近くにはコンビニ以外何もないところで、竹林の生い茂った道がずっと続いているだけ。このあたりにはコンビニしかなさそうでした。この先、店員に近くに宿か泊まれるところがあるのか聞いてみよう先輩二人がレジに向かい、店員と筆談で話をすることにしました。僕は店内のものをブラブラ見て回りました。先輩二人を見ると何か雰囲気がおかしい、何かへんだなあと思いました。二人の店員がいて一人は（失礼だけど）年配のおばさんともう一人は若い女の人がいました。先に、先輩二人が年配の店員と話をしたけれど、よくわからないらしく、若い店員を呼びました。表情を見ていると笑っているようでした。筆談で説明を聞いて近くに宿があるらしい。あと1～2kmいったところにある。でも入る方法が特別らしい。先輩二人は店員に道を書いてもらいました。「危ないところと違うか？…」と話をしましたが、見ても自分にはわからないので、とにかく寝られるところまで行ってみようということになりました。コンビニで買い物を終えて、自転車に乗り坂を走って行くと、夜だったので竹林の道の先に一か所だけはっきり見えるものがありました。ピカッと輝くピンクや黄色、青？いや水色の派手な看板が見えました。僕はよくわかりませんが、先輩二人は想像していた通りだという…（皆さんはわかりますか？あとは想像にお任せします。手話では表現できないので、申し訳ないけど許してください。想像に任せます）とにかくその建物が見えてきました。入り方は特別でしたが、まあいいかと思いながら中に行き、建物の中に入りました。中は一区画毎に仕切られていたので、その一つに自転車を止めました。

ドアを開けて部屋の中に入ると、異様に大きなベッドが一つ。3人一緒には寝られないので、ベッドには二人が寝て、一人は床に寝袋で寝ることにしました。誰がベッドに寝るかジャンケンで決め、一番年上の先輩と僕がベッドで、1つ上の先輩が寝袋で寝ました。翌朝、自転車で出発しました。僕は生まれて初めてああゆうところに泊まったので勉強になりました。本当に感謝です。

自転車をこいで次は、四国のこの辺り、足摺岬まで行くことにしました。自転車を走らせるとしだいに登り坂になってきました。途中疲れてきましたが、行けども行けども登り坂が続きます。どこまで走っても下りにはなりません。休憩するところもなくこぎ続けました。当然、先輩は遅れて離れてしまいました。途中、とうとうこげなくなり、自転車を降りて押し登りました。峠についたら、あとは下り道をまっすぐ下るだけです。足摺岬まで楽勝にくだりました。

足摺岬には、夕方まえ、2時ごろに着きました。体の疲れもひどかったので、先輩が下りてくるのをしばらく待ちました。先輩が追いついたのが4時ごろになりました。しばらく休憩をして、先に進もうかどうしようかと話しました。体の疲れもあるので、近くの宿に泊まろうと決めました。近くに宿がありました。泊まって体を休められほっとしました。寝る

前に地図を確認したら「あっ！しまった道を間違えた。」さっき登ってきた道は車専用道路の「スカイライン」というのでした。他に海が見える平坦な道が本当はあったのに…。自分も先輩も3人とも間違えていました。とりあえず、疲れを癒すことにして眠りました。

3日目の朝。スカイラインでなく、海が見える道を走りました。平坦でまっすぐな道を走ると、あっという間に愛媛県に入りました。

四国には大きな道といえば国道11号線が走っていますが、愛媛からは別の道を走りました。再び登り道がありましたが、それほど急ではなく登りやすかったです。ところが、下りはひどく急な坂道でヘアピンカーブもありました。少し遊びのつもりで試しに降りてみようとして自転車でまたがりました。

(あとはどうなるか？想像通りと、思うけど…)自転車でまたがり降りていくと、あっという間に自転車ごと転げ落ちてしまいました。当然自転車の後ろの荷物はあっちのほうへ転がり、僕も怪我をしました。ひどい怪我でなく、足を擦りむいただけの軽傷で大丈夫でした。転げ落ちた荷物を積んで、今度は落ち着いて降りていきました。

夜には大洲あたりに着きました。寝るところをどうしようかと思い、昨日は足摺で宿に泊まったから、大洲では道路横でテントを張って寝よう決めました。探してみると建物の横に駐車場があり、テントを張り寝ました。夜中に寝ていると「ポツン」と顔に何かが当たる。「何？」寝ると「ポツン」、また「ポツン」…と、もうどうでもいいやと寝ました。

次の朝、テントの入り口を開けると、なんと！ザーザーぶりの雨が降っていました。いままで自転車で頑張ってきたのに…。一気に気持ちが塞ぎ込みました。先輩たちも同じ気持ちでした。1時間ぐらい、ぼーっとテントで落ち込んでいました。

このままではダメだ。どうする？また頑張ろうとなりました。テントをしまい、荷物を自転車で乗せてまた自転車をこぎだしました。今治まで走りました。

さっきの雨でテントはしずくが残っているので宿に泊まることにしました。探してみると近くにありました。安い宿で宿泊代は忘れましたが、建物は古く100年とは言わずとも、築70年60年？くらいの日本家屋でした。玄関に入ると受付には、暗い感じのおばあさんがいました。着いたのは夜だったので電気がついていましたが、日本家屋らしく暗い。長い蛍光灯でなく、丸い蛍光灯がかさがついていました。電気がついていても暗かった。暗い中で宿代を支払い、宿帳に記入して、2階の案内された部屋へ行きました。部屋のドア(引き戸か？扉か？)は忘れましたが、部屋の戸を開けると言葉を失いました。昔のろうや(鉄格子)みたいで、畳が3畳いや6畳の間でした。古い部屋でも構わないと、布団を3つ敷いて、服を着替えてお風呂に行きました。

お風呂は狭くて一人しか入れないので一人ずつ入るよう言われました。先に先輩二人に入ってもらい、僕は最後に入りました。シャワーをして洗い終わり、服を着て、部屋にもどるのですが、部屋は二階です。廊下も暗く、まっすぐ行って右に曲がり階段を上ったらあります。薄暗い廊下を歩いていくと、二階から1つ上の先輩が下りてきて階段の曲がり角で鉢合わせ。「わっ！」「わっあ！」とお互いに声を上げて飛び上がりました。互いに顔が見えなかったのも、同時に肝をつぶしました。「だいじょうぶか？」「ごめんよ」と気遣いながら部屋に戻り、一晩寝ました。

翌朝、今治を出発して、また自転車で走りました。新居浜まではすんなり平坦な道なので走れました。夜には香川県に入れました。夜はどこで泊まる？ どうしよう？ とテントに泊まることにしました。どこかにテントを張れるところはないかと探してみると、入場防止用のコーンが棒でつながれているのが見えました。昔の高松駅は知っていますか？ 今は新しいですが、まだ工事中の時、建物は立っていましたがオープンがまだの時でした。この中に黙って侵入してテントを張って寝てもいいだろうと話して、自転車を柵の中に入れました。(本当はダメだよ。みんなは真似をしないように)先輩も運び入れました。

どこで寝ようかと、地下駐輪場の坂になっている手前に平らなちょうど良いスペースがあり、自転車を置いて、その下に寝る準備をしました。

晩ご飯を買いに行こうと3人でコンビニに行き戻ってみると、係員と警備員二人がいました。「ここはダメだよ。あっちへ行きなさい。」と追いやられ、「わかりました…」と、せつかく寝る場所を確保したけど、片付けて荷物と自転車を柵の外へ出しました。

寝る場所を探していくと高松港のところに自転車を並べて立ててあり、所々寝られるスペースがありました。そこにシートを敷いて寝ました。その頃は5月といえどもまだ寒く、海風が吹いてとても寒いので、パーカーを着て、寝袋で頭まですっぽりかぶり顔も隠しました。本当は顔を出して寝ますが、自分の温かい息が寝袋の中で循環するように紐を絞って顔を隠しました。一晩寒さに震えながら寝ました。

朝、顔に何か当たり目が覚めました。「なんだ？」と、起きて寝袋から顔を出してみると、先輩がボールを僕の顔に落として、跳ね上がるのをとっては、また落としてふざけていたのです。

とにかく出発し、自転車をこいで徳島までやっと無事に帰ってきました。一週間かかりました。

自転車で四国一周をしたおかげで、これからの人生「よし、やれる！」良い思い出があるから頑張れると思える良いきっかけになったと思います。(これからの人生で何事においても頑張れるきっかけとなりました)